

「ヒルゼンエキスで出血する。気味が悪いだけであるが、獵期中にはいない。」

また、河川や谷川などにカワウが来て漁業に関する被害額は億単位とされる。有害鳥獣駆除は行われているが、効果がないのが実状で、今後の見直しも深刻化している。カラスは、被害はあるが目立たなくなった。それでも駆除の対象だが、牛舎に群れて餌を漁る。他にはヌートリア、ハクビシン、タヌキなども果樹園や畑に被害を与えている。だが、早い段階で収穫を終えれば被害は減少される。

鳥に関しての被害は、ヒヨドリだけである。キジは河原周辺に付き、数としては減少。ヤマドリも私の区内では減少、出合いは少しだ。コジュケイはしきりと見るようになった。キジに関しては、毎年放鳥を行っているが、増殖していない。ヤマドリに関しても減少傾向で、一度山林内で割れた玉子を見たが出合いはなし。

ンジカ、サルが主体で、農作物に對する被害の増加が深刻な問題とされ、獵友会としても対策を講じる時期にきている。

●自然界の動向

●深夜の又聞き談

この秋口は、人間だけでなく山野の鳥獣も活発に動き始め、農作物の被害が目立つ。都会の人が山里を訪れ、サル1頭、ニホンジカ1頭を目撃すれば、「自然動物園だ」と感動すると言う。しかし、そこで生活する村人にとっては迷惑なだけで、収穫期になると丹精込めて作った作物を喰い荒らされる。ひどいのは、サルが群れて来て、カボチャを抱えて持ち去ってしまう。

イノシシ、ニホンジカ、ハクビシンの被害も多く、防護対策に電気柵で囲うが、夜行性には効果がなるとされる。また、今年は冬の訪れが早いのかクマが出没し、広報で注意を呼びかけるが、家の軒下のニホンミツバチの巣箱を荒らし、1年間溜めた滋養分の多い天然の蜂蜜を食べられてしまうという。

年々被害は増加し、獵友会員は高齢化して減少している。

●高病原性鳥インフルエンザ

地球温暖化による不吉な兆候に包まれた自然界であるが、地方では豪雪に見舞われ、大物獵に関しては豊獵の情報を得るが、反面、平成17年の秋口から18年の春先にかけて渡り鳥となる野鳥を見ない。アトリの大群5000羽、1万羽の目撃談はあるが、私は10羽ほどしか確認しておらず、事実の確定はできない。

昨年度(17年)は、年間を通しての好天候と、台風の少なさに木の実際は大豊作(反面、キノコが不作)であったが、平成18年度になり、厳しい冬場の餌不足となった。しかし現実には、どこの土地へ行こうが、木の実を食べられることなく残り、早々と賞味期限が切れようとしていた。鳥インフルエンザ

の影響であろうか。そんな中で、カモ類は目撃できた。

樹木は、自分で移動することも種子をバラ蒔くこともできないため、1年おきの周期で木の実をならせて色づかせ、鳥獣の食指を誘い、種子を遠くへと運んでもらい増殖するが、昨年度はクマとサルの被害が少なく、異常な年ではあった。

\*参考文献

「現代農業」別冊『害鳥害獣はこうして防ぐ』、『山の畑をサルから守る』(井上雅央著)、『山の畑をシカから守る』(井上雅央・金森弘樹共著)、『イノシシから畑を守る』(江口祐輔著)以上、農文協発行。『稲作の起源を探る』(岩波新書)

極めたい狩獵の道

神奈川 田宮 治

●ローマは一日にして成らず

何事においても美しく、素晴らししいのは「頂点を極めた」ことで

ある。

こだわりの心を持ち、日々黙々と自分の信じることに打ち込む。失敗を恐れず、必ず成る…の強い

意志を貫き、目標に挑み続ける先にこそ頂点はある。

今夏(18年)の高校野球は、近年にない盛り上がりを見せ、頂点に立ったW高校の戦いぶりは「素晴らしい」の一語に尽きる。「ハンカチ王子」：まさにヒーローの誕生であり、自信に満ちた勇姿がそこにあった。このような光景を目の当たりにすると、何より生きる力や元気をもらったようで、何とも嬉しい。ともすれば忘れがちな夢と希望を私達に思い出させてくれ、清々しい気持ちになった。

一方、敗れたT高校とて、実力は紙一重であり、胸を張ってほしいと思う。純心な若者が目指す先には、限らない未来が待ち受けている。皆に大輪の花を咲かせてほしいと願うものである。



奈智号(左)とウルフ号(先導犬)

手前味噌になるが、遠い昔の高校時代、私にも国体を目指し泥まみれに練習を積んだ日々があった。前述の高校野球に比べればお粗末ではあるが、ただ一つ「信念を持って挑戦し続ける」という観点からすれば、決して引けをとるものではないと思う。

だが、若者が掴んだ「頂点」は、あくまでも高校生活における頂点であり、次へのステップにすぎない。若者は、さらに次の目標を設定し、新たな挑戦を始める。その努力こそが尊いことであり、その姿こそが美しいのである。

純真な若者の、欲も邪心もなく、ひたすら母校のため(としたい)に戦うその姿に万人は拍手を送るのである。その中でできた貴重な体験と、苦楽を共にしたチームメイトは人生の宝となる。この歳になっても、かけがえのない友がいることは幸せである。

何事においても、大事なことは初志貫徹の心構えであり、これこそ成功の源である。人生においては、「良き友を持つているか」「誇りを持って生きているか」：が大切である。狩猟であれ、スポーツであれ、その道を極めることは並大抵のことではない。

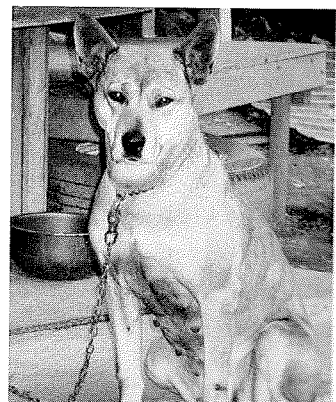
狩猟において、皆が等しく誇りの持てる域に達するには、獵人としての自信と責任を持つことであり、同時に、人から信頼・信用される人間になることである。しかし、「言うは易し、行うは難し」で、一朝一夕にできるものではない。毎日の努力・精進の積み重ねが結果を生むのである。

目標を高く掲げ、日々の訓練を怠らず、頑張り通すことによってのみ誇りの持てる獵人(社会人)になれるのだと思う。

威風堂々：、胸を張って獵野に立つには、まず自身を磨くことである。獵の知識はもとより、心構えやマナーも含まれる。次に、絶対に主人を裏切らない「獵犬」の飼育と、訓練技術を磨くことである。獵野にあつてはマナーを守ってこそ、安全で安心、楽しい獵ができる：ことを肝に銘じておくべきである。

狩猟は、自分が求めた趣味である。マナーも守れないようなら、獵野に立つ資格はない。

獵であれ、武術であれ、人生であれ、その究極は「道」であり、その道を極めたいと誰もががくのである。われわれが努力・精進の末に、自他ともに「獵人」と認



まだまだ!! 先犬富士三三

められ、そのことを誇りに獵野に立ったときこそ、自ずと進むべき方向が見えてくると信じている。願わくば、現状に甘んじることなく、先の見通せる獵人になりたいと思っている。

私が日頃気に留めておくことに、「趣味は一級品たれ」がある。「狩猟が趣味です」と言うからには、自身の獵技術や心構えはもとより、愛犬の獵芸から取り巻きの獵友に至るまで、全て「一流」にこだわりたいと思っている。

### ■狩猟を取り巻く現状

なぜ、こうなってしまったのか?

おそらく、人類(ヒト)が地球上に誕生したときから、生きていくうえで必要な食べ物(生物や動物)は、獲って食べる：が続いてきたと思われる。まだ作物を育てる知

# 特別企画 獵人の誇りを胸に!

恵も知識もなく、ひたすら野山の獲物を獲って食べていたに違いない。「狩り」である。

ヒトは体験することによって知恵が磨かれる。やがて狩りにおける狩猟具が生まれ、銃や罠を使った「狩猟文化」が確立されていくことになるが、まだまだ狩猟生活で、生きていくための食料の確保が大前提だった。生きるため：の大義名分があったため、誰も狩猟者を生き物を殺す「残忍者」とか「情け知らず」とは思わず、むしろ、農作物を荒らす鳥獣を成敗してくれる善行者となっていたはずである。

それゆえ狩猟者は、当然のことながら人々に愛され親しまれた「森の番人」であり、堂々と獵野に立ってたと想像できる。人々が狩猟を快く受け入れ、その必要性までも認めていたことで、狩猟の「意義」も立派に成り立っていたのではないだろうか。だが今、時代の風は獵人に向かつて吹くようになってきた。

いかに時代が変わろうと、人々に愛され親しまれ、受け入れられるもの(こと)でなければ栄えることはない。そこに、いかなる努力があっても…である。

歴史を遡っても、どんなに努力し頑張っても消えて行く定めにあったもの(こと)がある。例えば石炭産業であったり武家社会。その一方で、さしたる努力もないまま、時代の風に乗って成長してきたもの(こと)もある。だからと言って、何の努力もせずに…というのでは、人間として生まれた価値がない。そんなことを考えると、まさに危機的状況にある「狩猟」に思いが行ってしまう。今や、狩猟界を取り巻く現状は予断を許さないほど悪化の一途を辿っている。自然環境破壊は世界規模で広がり、その回復と保護が問題になっている。人口の増加と経済の発展は、時に自然環境の悪化を招く。車社会における排気ガスなど、典型的と言ってもよいだろう。

この自然破壊を食い止め、緑の地球を再生していくことが世界をひいては日本や日本の狩猟文化を守っていくことにつながると思う。最近、各地において人家近くでのクマの出没が見られ、人々を恐怖に陥れているが、これも自然破壊が原因である。獵場問題も含めて、自然や野生鳥獣との共存の道を早急に探さなければ、狩猟そのものが滅びてしまうことにもなりかねない。

人間社会における人間の心の変化も見逃せない。心が病んでいるのだ。信じられないような事件が毎日のように報じられ、それに慣れてしまった日本人の心も心配である。どこに行くのか日本…そんなふうにいるのは私だけだろうか。

今は、スーパーに行けば、世界中の産物が簡単に手に入る時代である。それゆえ、イノシシなどを獲って、それを食料にしないでよい。そんな世の中になってしまったのだ。当然、狩猟者を見る社会の目も、狩猟者自身の考え方も変わった。つまり、狩猟者の「プロ」から「アマ」への移行である。私をはじめ、狩猟を趣味として、スポーツ感覚で楽しむようになってきたと思う。その意味からも、これからの狩猟のあるべき姿は、「人々に愛され、受け入れられ、そのうえで自分も楽しい」ものでなければならぬ。

とは言っても、忘れてならないことがある。それは、卓越した猟技術とプロ根性(魂)である。いかに時代が変わろうと、狩猟は命を懸けた戦いであり、いつも危険と隣り合わせの行為である。銃を持つことの意味、命を懸ける意義を



1軍入り。右より：ナオ号、奈智号、先犬クマ号



一流去のサクラ号

考え、いついかなる時にあっても、「獵人魂」を忘れずに獵野に立ち続けたいと思っている。

## ■ 獵歴50年の節目で…

私にとって、平成18年度は特別な獵期である。「十年ひと言」と

言うけれど、よくここまでやってこられたと思う。狩猟が好きで、山が好きで、そして何より好きなのが犬である。私の子供の頃は実に良き時代で、川で魚を捕ろうが、海で貝を捕ろうが、山でヤマドリを追いかけようが全く問題はなかったし、いつも傍には犬がいた。

そして、小学校三年生くらいから父や兄達の後に付いて「猟」の何たるかを学び、当然のことのようにその道を突き進んで来た。そんな私は、来年(平成19年)の3月10日で70歳になる。初めて狩猟免許を手にしてからちょうど50年の節目でもある。この50年は長いようでもあり、また、あつと言う間であつた気もしている。

好きなことをやり通した：という点では、狩猟こそ私の人生その



バリバリの1軍。先犬フル号

ものであり、生き様とも言える。まさに感無量であり、この上ない幸せを感じている。その中で、本誌に「ジジの単独猟」および「ああ、猪猟泣き笑い」を発表し、私の経験が少しでも読者の役に立てば：：と思ひ、成功談や失敗談を述べてきたが、なかなか思うようには書けないが本音である。

原稿執筆に当たっては、拙い文章であつても、せめて真実をありのままに綴っていく中で、「単独猪猟」の極意といったものが伝えられたらと思っている。

### ■禍転じて：：

私は本誌を通して、猟場で起こった問題を提起してきた。それは、どの県においても起こっている、起きてもおかしくない問題であつたが、多くの読者より励ましの手紙や電話をいただき、感謝している次第である。

狩猟者全てが、悪化する狩猟環境の中で、狭まる猟場と減少する獲物に対する考え(譲り合い、分かち合い、共に喜ぶ楽しい共猟：)を大きな心で受け止め、狩猟の良い流れを作っていけたらと思つます。ルールやマナーをきちんとして守

り、言動の是非を自らに問うてみることである。獲物についても、「量より質」を考へる時ではないだろうか。我欲を捨てての共存共栄こそ、狩猟の永続につながると思つている。

さらに、少なくなつた狩猟人口を嘆く前に、まずは猟人としての自己を磨くことである。思いやりの心を持つて社会に愛され、親しまれることによつて、猟人の質が高められ、ひいては一般社会の狩猟への偏見をも払拭できるのではないだろうか。

### ■知恵と英知の結集で：：

狩猟は、今まさに崖っぷちに立たされている。右肩上がりのおかげなら良策もあるが、起死回生のグランドスラムはない。狩猟も50年前には、ゴルフと並んで紳士のスポーツとして堂々と存在し、羨望的であつた。当時は、夢見心地で銃を抱きしめ、「どうだ」とばかり胸を張れたものである。

あれから半世紀、ゴルフと狩猟で、どうしてこれほどの差が出たのだろう。それを解明できれば、打つ手が見えてくるかも知れない。「ゴルフVS狩猟」、まず両者の歩んだ今日までのプロセスを検討して

みたい。ゴルフにしても野球にしても、サッカーにしても、人気スポーツには必ず成長する共通項がいくつもあり、それらが良い流れとなつて伸びてきている。

具体的には、まず多くの人々(一般大衆)に愛され、親しまれていく点である。スポーツをする側も、それを観戦(応援)する側も一体となつて楽しんでいく。二番目に、どのスポーツにも確固たるルールがあり、そのルール守らせる絶対的審判(審判団)が厳しい目を光らせている。三番目は、プレーをするための立派な場所(競技場)がある点である。

人気のあるいずれのスポーツも優れた技術とパフォーマンスによつて観衆を魅了し、観衆はその見返りに入場料を払う。ゴルフの場合、日本全国に、また世界各地に立派なゴルフ場があり、そこでルールに則つて正々堂々とトーナメントが行われている。ファンは一流プレーを見ようと詰めかける。多額な賞金が懸けられ、若干20歳くらいの子女子プロでも億の金を稼ぎ出している。

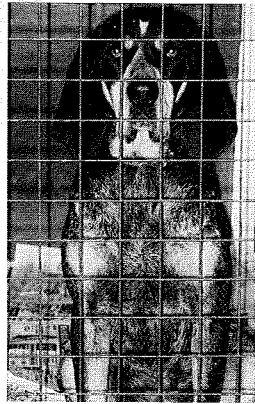
場所や稼ぎで比較するのどうかと思ふし、ゴルフを羨んでいるわけでもない。ただ狩猟も、ゴル

フ場のようにしっかりと管理された専用の場所があれば、獵場問題も一気に解決するだろうと思う。現状では獵場は狭まり、ともすれば争いの種になり、とても「正々堂々」とはいかない。

ルールの面でも獵人任せである。ひとたび獵野に立てば、審判も觀衆もない。1人で(単独獵の場合)全てを判断して大自然と獲物に立ち向かわなければならぬ。出獵に当たっては、例え小道であっても銃に被いをして歩かなければならない。自分で自分を律するのが獵だと言える。

以上のことを考えたうえで、獵人全ての知恵と英知を結集し、良い方策を打ち出さなければと考える次第である。獵人同士、さらなる団結と、良い意味での仲間意識を持つていただきたい。

私の今獵期は、基本的には単独での猪獵だが、あくまでも平常心



種牡犬サム号

でありたいと思っている。前述の諸々を心に留めて、鍛え抜いた愛犬を3〜4頭引き連れ、妻と孫と3人、のんびり楽しく行こうと思っている。

愛犬の仕上がり具合を楽しみながら、「獲れずもよし、獲れてなおよし」の心境で、野山を自由に歩きたいと思っている。獵そのものも大事であるが、健康のためにも1日でも多く出獵したい。幸い今年度は、共獵でイノシシの止め芸を体験していただいた方々や、「狩獵界」誌や子犬の縁で、近県のあちこちから「ぜひ来て、教えてください」との嬉しい誘いをおたいており、例年になく張り切っているところである。

言うまでもなく、単独猪獵においては、自分と愛犬達の力でイノシシを撃ち獲るところに醍醐味がある。もちろん、最初から巧いことなどない。逃げられたことをバネにして、まず全力で1頭を獲ることである。そうすれば、あとは面白いように次から次と獲れるようになる。

やがて、「何が何でも獲りたい」という欲が薄れ、大物獵の真髓とも言える猪犬の芸や、イノシシを狩る過程：つまり、納得のいく獵

ができたかにこだわるようになる。「こだわり獵」の結果、知らずに単独獵を極め、「量」から「質」への転換が行われていく。

そうなったとき、獵人として最も大切な「心」の部分に辿り着き、自らの力も愛犬の獵芸も一流にな

った：と言えるのである。願わくば、単独獵人が皆そのようになつて欲しいと思っている。皆様の今獵期が元気で安全で、楽しいものであることをこころより祈っています。

## 誇りある獵人(界)になるために

熊本 藤田 司

### ■肩身の狭い狩獵者

飽きもせずに、40年来狩獵を続けてきた。5年ほどの鳥獵を除き、あとは全てイノシシの共獵(巻き狩り)であった。勢子もやったし、張り番(射目待ち)もやった。年老いた今は、張り番がほとんどである。考えてみると、よくも同じグループで長々とやってきたものだと、我ながら感心している。

その間、色々な出来事もあったが、狩獵者としては、グループとともども誇りを持ってやってきたと自負している。

私は常々、狩獵は他のスポーツや遊びと違って、「生活環境の保

全、農林水産業の健全な発展、生物の多様性の確保」等を趣旨・目的として制定された「鳥獸法」の中で、「自然の保全、農林産業の被害の予防、日本在来種の保護」等を目的として規定され、許されているもので、その厳正なる法律の下で実行できる行為であると考え、誰はばかることなく、謙虚に堂々とやってきた。

それゆえ、獵仲間をはじめ周りの人達にもそのように言ってきた。と言うのも、私自身、法令はもちろん、マナーについても絶対に守るぞ。事故は絶対起こさないし、遭わない(巻き込まれない)ぞ：と自らを戒め、心して出獵していた